

環地中海における食料貿易と食料生産

—— チュニジアを中心として ——

末原 達郎・坂梨 健太

Tatsuro SUEHARA, Kenta SAKANASHI : Transformation of Tunisian Food Production and Food Trade

In this paper, the authors analyze the transformation of Tunisian food production and food trade over the span of fifty years.

At independence, the Tunisian agricultural economy had a two-part structure. One focus was the production of grapes for wine and olives for oil meant for export to European countries. The second focus was the production of wheat, a staple food for Tunisian people, though domestic production was insufficient to meet demand. As a result, one third of the wheat consumed nationally was imported from European countries.

During these fifty years, the population of Tunisia increased to two and a half times its earlier size. Despite a threefold increase in the domestic production of wheat, the quantity of imported wheat increased sixfold. The cost of imports also increased. On the other hand, the quantity of olive exports increased by three times. In these years, the total value of olive and date exports of compensated for wheat imports.

Another characteristic of Tunisian agriculture is that its production is affected greatly by the weather, especially annual rainfall. Every few years, they suffer a serious loss of food production, especially for wheat, due to a shortage of rainfall. Tunisian agriculture remains dependent upon rainwater.

Tunisia's food trading partners have also changed. Tunisia currently imports wheat not only from Mediterranean European countries, but also from North American countries and Eastern European countries. Meanwhile, Tunisia exports most of its olive oil to Mediterranean European countries. To date, Mediterranean Islamic countries have been important trading countries as well as Mediterranean European countries.

1. はじめに

食料を確保することの重要性は、人間の生死の問題に直結している。現代社会は、食料を確保するための農業生産を、一般の市民自身が考える時代に入ったと考える。このことは、具体的には三つのことを意味している。

ひとつは、多くの人々は農業に従事しなくなったにもかかわらず、農業者以外の人々が農業のことを知り、研究する必要がでてきたという側面である。人々は、自分自身の食料について、どのように生産され、どのような流通経路を経て、どのように自分の口に入るのかを確認する必要がでてきたからである。食料の質と量の安全については、常にモニタリングを

して、確認する必要があると多くの人々が考える時代に入ったからである。

二つめは、世界においては今なお食料不足が続いており、そのことが原因で栄養不良に陥ったり、飢餓に直面している人々が10億人近くも存在しているという事実である。これらの人々の食料の確保や栄養の確保に関する研究は、いったい誰が担い、誰が推し進めるべきかという点が問われている。¹⁾

三つめは、市場経済化の世界的拡大により、地域内で生産され消費される農産物の量が増加する割合よりも、地域外から運ばれ購入される農産物の量が増加する割合の方が大きくなった時代に入ったことである。農産物は他のものと比較すると、地域や国境を越えて販売され、輸出入される割合は少ない。特に主食作物に関しては、それぞれの地域や国家内部で生産され、消費される割合が比較的高いのが一般的である。しかし、20世紀末からの市場経済の枠組みの世界的な拡大により、より多くの農作物が市場に出まわり、輸出入されることが多くなってきた。先進国では一般的であった農産物の輸入が、現在では、多くの発展途上国でも一般的となってきた。特にアフリカを例にとると、アフリカ各国では、農業生産に従事する人口が多いにもかかわらず、農産物や食料の輸入は増加し、そのことによる貿易赤字が発生し、継続している。国によっては、経済的破綻をもたらしかねない状態になっているところや、主食作物を輸入に依存しすぎたため食料不足に直面し、暴動が発生している国々も存在する。このように、農業生産と食料確保の問題は、生命の存続とともに、社会の存続や国家の存続にも深く結びついていることがわかる。

現在の日本の市民生活では、食料問題が逼迫しているようには考えられないかもしれない。しかし、食料問題は常に危機的状況になる可能性を秘めている。日本の食料供給のもつ根本的な脆弱性は、この二十年間でより拡大しつつあると考えられる。一方で、世界の食料問題の持つ脆弱性もまた、いまだ解決されないままで存続し、拡大し続けている。一見無関係なように見える両方の脆弱性は、基本的なところで大きく関係していると筆者は考える。しかし現実には、両方の接点が見えにくいことが原因で、世界の食料問題の中から日本の食料問題の解決のための糸口を見出すことは、先送りし続けられてきた。筆者は、日本の食料問題は、世界的な食料問題と共通の基盤にたっていると考えているが、そのことを見るためには、むしろ、日本以外の国や地域で見られる食料問題と直接向かい合うことが重要だと考えている。

2. 問題の所在—アフリカの国々にとって、地中海貿易とは何か

本論ではチュニジアを中心として、食料生産と食料貿易の構造を明らかにすることを目的とする。チュニジアはアフリカの北部、地中海に面した国である。しかし、その生態環境は、砂漠気候と地中海性気候とが接しあう場所にあたる。チュニジアの食料生産を論じることは、

砂漠と地中海という二つの気候要因、さらにその中間に位置するサヴァンナ気候をも含んだ地域における農業と食料生産を考えることになる。中尾佐助は、その著書『栽培植物と農耕の起源』²⁾の中で、世界の農耕の起源地として、サヴァンナ農耕文化、地中海農耕文化、新大陸農耕文化、東南アジア根栽農耕文化、照葉樹林農耕文化の五つを挙げている。チュニジアの農業は、このなかでもサヴァンナ農耕と地中海農耕の両方の特性をもった枠組みに属している。さらに、チュニジア南部にはサハラ砂漠が含まれている。砂漠性の気候は、農耕を生み出す起源地とはならなかったが、砂漠独特の農業が存在することが、現在ではよく知られている。以上のように、環境の基本的要因とそれに基づく農業生産との関係を明らかにすることが、本論の第一の目的である。

本論の第二の目的は、食料貿易と食料生産の関係を明らかにすることにある。特に、本論では地中海をめぐる食料貿易の解明を試みる。地中海は、アフリカとヨーロッパを結ぶ海の世界である。また、古代から現代にいたるまで、地中海は貿易の海であった。ヨーロッパ側の諸国にとっても、アフリカ側の諸国にとっても、地中海のもつ意味は大きい。本論では、研究の視点をアフリカ側の国々におき、これらの国々とヨーロッパとの間でどのような食料貿易が行なわれてきたかを明らかにする。特に、チュニジアをはじめとする北アフリカの国々で、これまでどのような食料貿易が行なわれ、それが地元の農業生産にどのような影響を与えているか、またその結果、それぞれの国や地域に、どのような食料の供給や分配の現象としてたち現れているかという点を明らかにしたい。

地中海の貿易に関しては、歴史学ではすでに膨大な研究がある。特に、フェルナン・ブローデルの著書『地中海』³⁾は、16世紀世界経済の成立と貿易のシステムを海から解き明かしてくれる名書である。この『地中海』でブローデルは、地中海の自然環境条件を「環境の役割」として最初に位置づけ、全体像を見据えながら詳細な分析を積み重ね、歴史研究と経済システムの研究を開始しているところに、大きな特色をもつ。

しかし、歴史学のさまざまな蓄積を離れて、現代の地中海世界、特に食料経済や食料貿易を対象としたものとなると、研究の蓄積は極端に少なくなる。食料経済や食料貿易を分析したもののうち、アフリカの側に軸足を置いて地中海の役割を分析したものは、さらに少ない。いったい、チュニジアをはじめとする北アフリカの国々では、農業生産としては何がなされており、食料生産はどのような状態であるのか。また、現代の地中海貿易では、それら生産された食料は自国内でどのような役割をはたし、どのように貿易されているのか、さらにそれがこの50年間どのように変化したかを明らかにするのが、本稿の目的である。

本論中、数多くのチュニジア政府の発行する経済統計とFAOを始めとする国際機関の経済統計の数字を指標に用いる。しかし、本論の意図するところは、農業生産と食料貿易の意味を、農学的、経済学的、人類学的に考察する基盤を明らかにするところにあり、統計数字によって、何かを証明することが目標ではない。また、研究の方法として、フィールドワークによる実態調査を行なうことによって、食料の意味（食料生産、食料分配、食料の文化的

意味、経済的役割)を統合的に考察することを目標としている。

本論は、2011年9月のモロッコにおける調査、2012年8月、9月のチュニジアにおける調査結果に基づいている。

3. チュニジアの政治・経済・社会的背景

チュニジアは、人口1048万人(2010年WHO調べ)面積16万4000km²の、アフリカ北部に位置する共和国である。北は地中海に面し、南には広大なサハラ砂漠が存在する。気候的には北部が地中海性気候、中部はステップ気候、南部が砂漠気候となる。

首都チュニス、古代ローマ帝国と戦った古代フェニキア人の首都カルタゴが紀元前9世紀から紀元前2世紀まで存在した都市である。7世紀以降のイスラーム時代には、いったん首都はカイルワンに移ったが⁴⁾、13世紀のハフス朝時代には再び首都となり繁栄し続けてきた。現在では近郊の都市地域を含めると200万人を超える大都市となっている。⁵⁾

現代チュニジアは、1956年旧宗主国のフランスから、まず王国として独立し、翌1957年に共和制に移行した。独立後のチュニジアの政治的時期は、一般に三つの時代に分けることができる⁶⁾。第一の時代は、独立運動を指導し、独立直後の王国では初代の首相となり、次いで共和国になってからは初代の大統領となったブルギバによって国づくりが行なわれた時代である。ブルギバは、セネガルのサンゴールと共に、フランス圏アフリカの国際的な指導者のひとりであり、フランコフォン・アフリカの国際機関を設立したことで知られる。ブルギバの時代は、チュニジアの近代化、西欧化が進められた時代であり、約30年間続いたことになる。

ブルバギの後任は、軍人であるベン・アリが1987年、クーデターにより2代目大統領となり、その後憲法を改正して23年間にわたり政権運営をし続けた。特に後半は独裁色が強くなり、一般民衆から遊離して、不満が蓄積していた。これが第二の時代にあたる。

チュニジアでは、2010年11月から2011年1月にかけて、いわゆる「ジャスミン革命」が勃発した。⁷⁾「アラブの春」と呼ばれる北アフリカ一帯に起こった民主化運動が、2012年10月の現在に至るまで継続している国の一つでもある。「ジャスミン革命」の背景には、就職難や物価高があったことが指摘されている。さらに、物価の中でも食料価格の高騰に一因があったとされている。2011年10月、ジャスミン革命の結果新たに「制憲国民議会」が制定され、初めての民主的選挙が実施され、政治的にはチュニジアは新たな時代に入った。これが第三の時代にあたるが、まだ開始されたばかりである。新しい政治体制は政治体制としてはまだ不安定で、確立したものにはなっていない。「アラブの春」の先駆けとなった「ジャスミン革命」が今後どのような形で展開をするかも未確定である。

チュニジアでは、主食となっているのは、小麦を原料としているパンとクスクスである。

チュニジアでは小麦が生産されているが、それは、毎年平均約160万tにすぎない。2000年から2010年までを見てみても、生産量の少ない年には、たとえば2002年におけるように、わずか42万tになる。比較的生産量の多い年には、160万t(2010年)から200万t(2003年)の小麦が生産されている。(図1)生産量がこのように、大きく変化し、少ない年は多い年の5分の1にすぎなくなるという現象は、チュニジアの農業が、その環境条件、特に気候条件と地理的条件に依存しているからである。降雨量の多少は、チュニジアのように降雨量が比較的少ないところでは、小麦生産に大きな影響を与える。また、どの季節に、どの程度の降雨があるかによっても、小麦の生産量は変化する。年々の気候条件の違い、降雨量とその時期および気温が、このように小麦生産の基本問題として存在する。

ちなみに、チュニジアの小麦の生産量を160万tとし、人口1000万人で割ると、一人平均160kgとなる。実際の、チュニジアにおける小麦の消費量は、これよりも上回る。そのため、チュニジアは毎年多くの小麦を、外国から輸入することになる。小麦の輸入量を概観すると、2000年から2009年にかけては、毎年平均して120万tを輸入している。少ない年でも100万t(2004年)、多い年になると190万t(2010年)が輸入されている。(図7参照)この数字は、チュニジア国内での小麦の生産量に、ほぼ匹敵する量である。

これに対し、農産物の内、果実や野菜の一部は、輸出用の商品となっている。特に、オリーブはオリーブ・オイルとして、ヨーロッパを中心に世界各国に輸出され、外貨を稼いでいる。2010年のデータを見るとオリーブ・オイルは10万8800t輸出され、その輸出額は3億931万ドルに達している。(図8参照)2010年度の小麦の輸入額が4億7701万ドルであるから、オリーブ・オイルの輸出額は、その65%に匹敵することになる。しかし、こうした数字も農産物の生産量や価格が変動するので、年によって変化することになる。たとえば、その前年の2009年度は、小麦の生産量が少なく、123万tの小麦を輸入した年だが、その輸入額は3億2154万ドルにすぎなかった。この年、オリーブ・オイルの輸出量は14万1600tであり、輸出額は3億9554万ドルであった。したがって、2009年に限ると、オリーブの輸出額だけで小麦の輸入額を上回っていたことになる。このことに関しては、後に論じる。

4. 環境の要因—チュニジアの農業生産

チュニジアは面積的には小国であるが、国内の生態環境には、大きな相違がみられる国である。チュニジアの北部は、地中海性気候に属している。たとえば北部に位置し、地中海に面しているチェニスの年間平均降雨量は467mmで、7月、8月の降雨量は平均10mm以下になる。しかし、9月から翌年3月にかけては毎月平均50mm以上の雨が降り、冬雨地帯である。

一方、中南部の都市ガフサは内陸部に位置しているため、乾燥度は高くなる。年間151mmの降雨量にすぎず、また平均20mm以上の降雨量がある月は存在しない。6月、7月、

8月の乾季には、月平均降水量はわずか6mmを下回る。ガフサはケッペンの気候区分では、ステップ気候よりr(年平均降水量)指数が少ないので、砂漠気候に分類されている。実際にチュニジア中南部を移動してみると、ガフサはステップ気候から砂漠気候へと移り変わる砂漠気候側の入り口に位置していることがわかる。ガフサよりさらに南部には、トズール、ケビリ、ドゥーズなどの町や村があるが、これらの地域はさらに乾燥しており、砂漠気候の典型例になる。

地中海性気候のチェニスから南部の内陸部に向かってなだらかな山々を超えていくと、かつての首都カイルアンにいたるまでの間に、植生が徐々に変化することがわかる。この地帯は、地中海性気候からステップ気候への移行地帯である。

以上のように、ケッペンの気候区分に従うと、チュニジアは大きく三つの生態環境区分に分けることが可能であり、それが実態にあっていることがわかる。ひとつは、北部の地中海性気候であり、第二は北部から中部にかけてのステップ気候であり、第三は南部の砂漠気候である。もちろん、気候区分や植生は、境界が突然現れてくるのではない。徐々に移行していくのであり、地中海性からステップへの、あるいはステップから砂漠への広い移行地帯がみられる。また、中部や南部においても、海岸近くになると降雨量も変化し、内陸部よりもやや湿潤になり、地中海性気候が現れてくるところがある。

フェルナン・ブローデルは、『地中海』の環境の役割の中で、最初に諸半島、海と沿岸部と並んで「地中海の境界」⁸⁾を位置づけている。そこでは、サハラ砂漠は地中海の近い境界と遠い境界を結ぶものとして位置づけられている。ブローデルが意味しているのは、地中海は海そのものだけでなくその周辺部を含みこんでおり、地中海は北のヨーロッパ世界と、南のアフリカ世界、さらには東のレバント世界や西の大西洋世界にまで広がりをもつものであった。サハラ砂漠は地中海の南側を構成する重要な存在であると共に、東に広がるアラビア半島、さらには中央アジアから旧世界へと広がる乾燥地帯へと連続するものとして捉えられている。たとえば、ナツメヤシは、インダス川から大西洋までつづくナツメヤシの分布する広大な広がりがあり、サハラ砂漠はその中心に位置づけられている。

ナツメヤシは、チュニジアにとって重要な農作物であり、果実である。チュニジア南部の砂漠地帯では、湧水のあるオアシスにしか、農作物はできない。砂漠の真ん中に位置するオアシスの町や村では、その内部に密度の高い農地を形成しているが、オアシスの範囲内においてのみ農業生産は可能であり、人々の生活が維持されている。このオアシス農業の指標となる作物がナツメヤシである。⁹⁾

ナツメヤシの実は、乾燥されて加工品となり、ヨーロッパをはじめ世界に輸出されている。現在では、チュニジアの農産物の輸出品の中で、オリーブ・オイルに次いで二番目に輸出額が大きいものになっている。¹⁰⁾ また、ナツメヤシの実は、チュニジア国内でも好んで食べられており、主食とは言えないが、主食に近い重要性を持っている。

北部の小麦作、南部のナツメヤシの栽培にたいして、中部ではオリーブの栽培が盛んであ

る。北部から中部にいたる多くの地域は、一面オリーブ畑になっている。オリーブの栽培は、地中海性気候のところ適している。しかし、実際に多くの農地がオリーブ畑となっているところは、チェニスの南、特にスースからエル・ジェムを通してスファックスへと続く海岸部に比較的近いところから、山地のふもとである。オリーブ畑そのものは、大規模な大農園のものと、小規模な小規模家族経営によるものがある。そのほか、政府の保有する大規模農園も存在する。

農産物としてはこのほかに、トマト、アーモンド、ピーマンなどの果物や野菜がある。¹¹⁾

5. 食料生産の変化

チュニジアの食料生産は、独立以来変化し続けてきている。ここでは1961年以降のFAOの統計を用いて分析を加える¹²⁾。

1961年時点では、チュニジアの農産物は、オリーブとブドウが最大の生産量と生産額を競っていた。オリーブが18万9000t、1億5133万ドル、ブドウが24万7000t、1億4119万ドルであった。いずれも輸出用(正確には輸出加工品の原料となる)の農産物であった。オリーブはオリーブ・オイルとして加工され、ブドウはワインに加工されて輸出される。この結果、オリーブ・オイルとワインは1961年のチュニジアの輸出額の第1位と第2位を占めており、それぞれ2309万ドル、1903万ドルの輸出額があった。

1960年代から1970年代になると、農業生産の中心作物に小麦が加わってくる。1961年には小麦生産は45万t、1970年になると小麦の生産量は51万9000t、生産額は、6915万ドルで作物中の第2位になる。

1980年になると86万9000t、生産額は1億2389万ドルに、1990年代になると、112万2000t、生産額は1億6107万ドルとなる。小麦の生産自体は年々の降雨量の変化によって大きく変わるが、生産量自体はこのように増加してきたことが分かる。

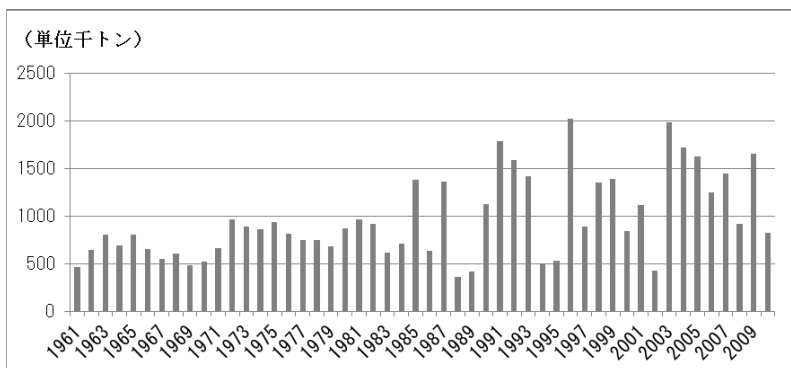


図1 小麦生産量の変化 (FAOSTAT より作成、筆者一部改変)

もちろん、小麦生産が増加した背景には、チュニジア全体の人口増加がある。図2は、人口の変化を示したもののだが、チュニジアの人口は1960年に422万人であったが1990年には822万人へと倍増している。人口増加は1990年以降も続き、2010年には1048万人に達している。人口増加に伴い、チュニジア国内で必要とされる小麦の量は増加する。

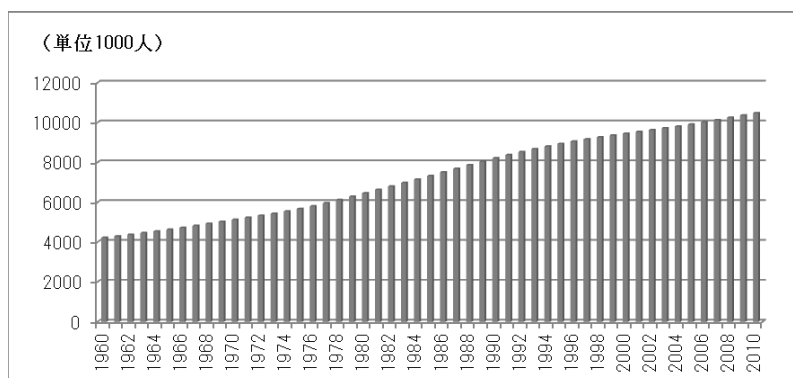


図2 チュニジアの人口変化 (FAOSTAT より作成、筆者一部改変)

人口の変化が1960年代の約2.5倍になっているのに対して、小麦の生産量も、約3倍に増加していることになる。ただし、2000年代以降は、小麦の生産量はそれほど伸びていない。むしろ、野菜、特にトマトの生産量が多くなり、小麦はオリーブ、トマト、牛乳に次ぐ第4位以下の生産額をもつ農作物になっていく。

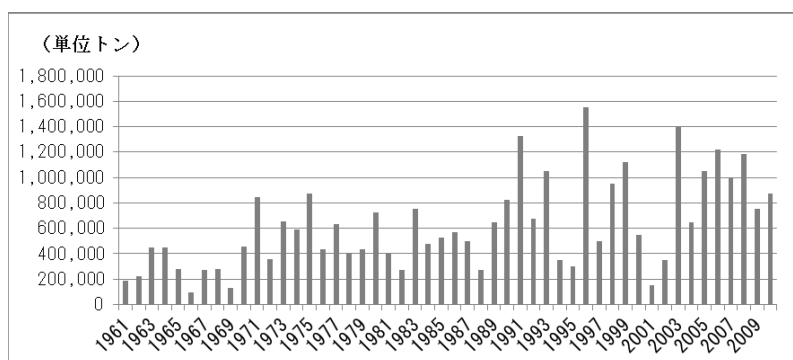


図3 オリーブ生産量の変化 (FAOSTAT より作成、筆者一部改変)

オリーブの生産量は、1961年の18万9000t から、2008年の118万3000t まで、大きく増加してきている。オリーブに関しても、生産量の大小は、降雨量に深く関係する。

ただし、生産量は降雨量に単に比例するのではない。穀類に比べると、オリーブはむしろ

降雨量が少なくても生産が可能であり、逆に降雨量が多すぎても生産量が減少する。雨は、適切な時期に少量でも降ってくれることが重要である。たとえば、2003年度には歴史上最大級の生産量で140万tを記録したが、翌2004年度には65万tに半減している。

オリーブの生産量の変動は、気候条件によるものだけではない。むしろ、オリーブという作物の果実のなり方と深く関係している。オリーブの生産では、数年に一度、果実の生産が極端に落ちる時がある。一本の木自体に、生産量が多い年と少ない年という一定の周期がある。たとえば1991年に良くなると、1992年には減少し、1993年には回復し、1994年と1995年には減少するという一定の周期のパターンが存在していることがわかる。ただし、生産量の落ちる年が1年だけなのか、2年続くのかは、こうした生産量の変化からだけでも推定できない。ここには、別の要素が存在するからである。

新たなオリーブが植えつけられて、10数年間は収穫できないが、やがてオリーブの収穫が開始できる年になる。オリーブの収穫の増加は、いつの時代にオリーブが植えつけられ、その木々がいつ収穫可能になったかに強く関係してくる。オリーブの木の植えつけも、二つの機会が関係している。ひとつは、オリーブ畑を新たに造成し、オリーブの新しい木を植えつける機会である。これは、オリーブ畑の所有者の考え方にもよるが、国際的なオリーブ・オイルの価格変動と関係している。オリーブ・オイルやオリーブの果実の国際価格が高くなれば、新たにオリーブ畑を造成しようとするオリーブ農家やオリーブ畑所有者も増加する傾向がある。第二は、個々のオリーブの木自体が、日照りや水不足、病虫害の結果、枯れてしまったり、あるいは一定の年齢がたって、オリーブの木のもつ実の生産量が極端に落ちてしまった場合に、新たなオリーブの木を植えることになる。オリーブ畑では、しばしば、こうした木の更新が意図的に行なわれており、一つの圃場の中でも常に新たな木を植えつけることが行なわれている。木の更新からある一定の期間たった後に、オリーブの果実の収穫は急増加することになる。

一方、ナツメヤシに関しては、1961年にはわずか3600t、生産額では1665万ドル、1970年でも3900t、1792万ドルにすぎなかった。それが、2000年には、1万500t、4826万ドル、2010年には1万4500t、5176万ドルを生産している。生産量は4倍強、生産額は3倍強に増加していることになる。ナツメヤシは、2009年のデータでは、輸出量が7万8000t、自国消費量が8万5000tで、生産量の約半数が輸出されていることになる。

最後に、野菜生産の変化を、トマトを一つの例として見てみる。1961年には、トマトの生産量は5万8000tにすぎなかった。ひとりあたり消費量に換算すると、一年で13.5kgとなる。トマトは、1970年代から生産量が大幅に増加する。1973年以降は、毎年20万tの生産量を超えるようになっていく。その後もずっと増産が続き、1980年代には40万t、1990年代には50万tを超え、2000年代後半になってからは毎年100万tを超える生産量になってきている。2010年の110万tを人口1048万人で換算すると、ひとりあたり一年で、105kgの消費が可能となる。これが、チュニジアの食生活を野菜の面から改善していると考えられることができる。

また、トマトは、小麦やオリーブに比較すると、生産量が増加する一方の農作物だといえるだろう。

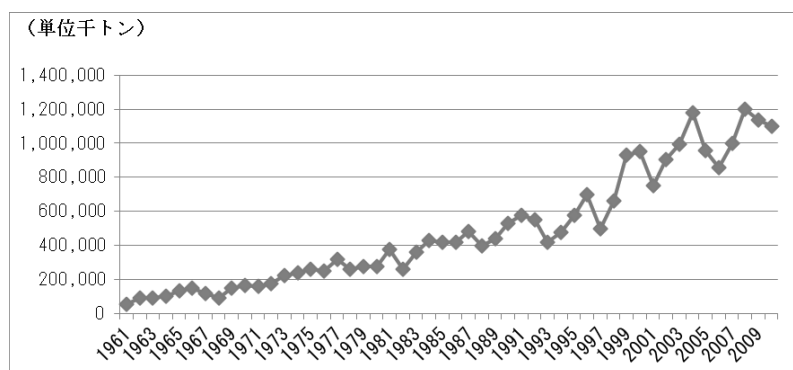


図4 トマト生産量の変化 (FAOSTAT より作成、筆者一部改変)

このことは、トマトの持つ消費の性格が関係していると考えられる。トマトの多くは、そのまま国内で消費されている。たとえば、2009年においては、113万5000tの生産量の中で8万9000tが輸出されているにすぎず、104万6000tは国内消費に回されている。トマトはチュニジアの日常生活の中で、頻繁に出てくる食物である。生でも食べられるが、特に煮込み料理やスープの具材としては欠かせない。トマトの生産量が増えてきた背景には、チュニジア全体の都市化の影響があると考えられる。都市近郊、特にチュニス近郊農村や地中海に突き出したボン岬の農村では、オレンジ畑やオリーブ畑とともに、トマト畑が広がりトマトの生産が盛んである。これらのトマトは、チュニスやスース等の大都市で消費されるだけでなく、中南部の中小都市や町にまで運ばれて販売されている。

6. オリーブ生産とその変化

チュニジアでは、南部の砂漠地帯以外の地域、すなわち国土の半分以上の地域で、オリーブが栽培されている。1962年に設立された Office National de L'Huile (チュニジア国立オイル協会)¹³⁾ が1977年に行なった調査報告書を用いて、1970年代におけるオリーブ生産の状況と、オリーブ生産の地理的分布と地域分類を図5に示す。

ONHは、チュニジアのオリーブ栽培を、北部、中部、南部という気候区を基づいた3地域ではなく、地形や地域特性、課題などによって15に分類している¹⁴⁾ (図5参照)。地域ごとのオリーブの栽培本数の違いがわかる。中でもスースからスファックスにかけての東沿岸部は、チュニジアのオリーブの主産地であり、今日でもその傾向は変わらない。

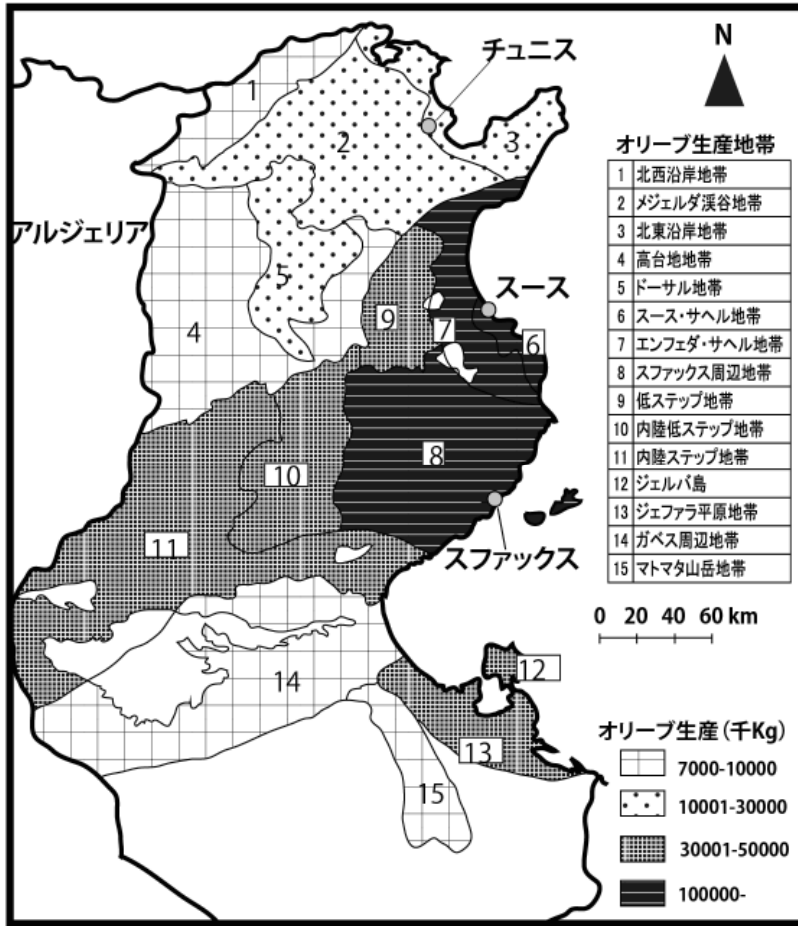


図5 チュニジアにおけるオリーブ生産地域の分類

(ONH, *L'Olivaiie Tunisienne*, 1977より作成、ただし筆者一部改変)

オリーブの生産性を向上させることは、1970年代当時からチュニジア農業の課題でもあった。1962年から1971年の期間には、平均300kg/haの収穫量も見込めなかったが、1972年から1976年の期間、北部では1200kg/ha、中部では1000kg/ha、南部では600kg/haと生産性の向上が見られたと報告されている。しかし、30年後の実際の結果から判断すると、2001年から2010年までの平均で、全国平均468kg/haとなっている (FAOSTAT)。1970年代は、輸出作物であったオリーブの生産向上は重要な目的であったと考えられるが、その農業生産見通しは、あまりに形式的すぎるか、あまりに甘かったと総括するほかない。

それでは、現在のオリーブ生産は、実際にどのようなになっているのだろうか。2012年に、筆者らがエクステンシブにチュニジア国内の農地を実際に調査した結果が図6である。

図6から、チュニス南部には小麦畑が、ボン岬周辺にはオレンジやブドウ畑、アーモンドやトゥガラシ畑が分布していることがわかる。一方、カイルアンから南西にガフサに向かう

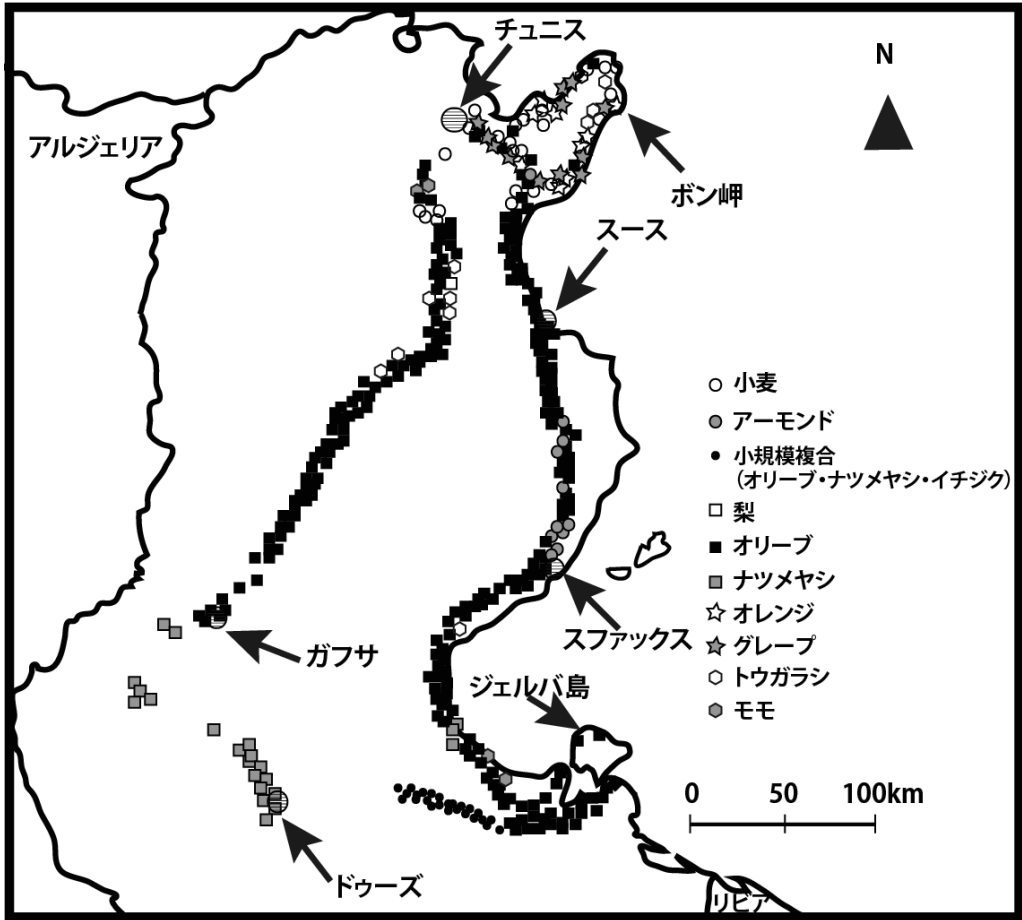


図6 チュニジアにおける種類別農地の分布

(2012筆者実態調査、GPS利用、道路周辺部)

ところではオリーブ畑が一面に継続する。しかし、ガフサからトズールに近づくとき農業景観は一変してナツメヤシを中心としたオアシス農業が行なわれるようになる。さらに南のケベリからドゥーズ周辺にかけても、砂漠地域でのナツメヤシを中心としたオアシス農業が連なる。南東部ではタメズレットからマトマタにかけては、オリーブとナツメヤシその他の小規模複合農業が行なわれており、海岸部近くになると再びオリーブ畑が多くなる。メドニンからジェルバ島にかけての南部海岸地域でも、オリーブ畑が多くみられる。東海岸をガバスからスファックスへ北上する地帯では、オリーブ畑が多数であるが、モモ畑やアーモンド畑も点在する。スファックスから北のスースにかけては、オリーブ畑が圧倒的に多く、その規模も大規模になる。スースから北へボン岬の付け根まではオリーブ畑が多く、その後、小麦畑やブドウ畑が広がる。

スースからスファックスにかけては、広大なオリーブ畑が広がる地域である。以下、スー

ス・サヘル地域に属する具体的な大規模農園の事例を検証する。

聞き取りをおこなったA氏は、現在3つのオリーブ畑を経営する大規模農園経営者のひとりである。オリーブ畑の大きさは、面積よりも植えられたオリーブの本数で認識されることが多い。たとえばA氏の畑では、木と木の間がそれぞれ25m間隔で植えられていることから、植付けられた本数からおよその面積を割り出すことが可能である。A氏の畑には1670本のオリーブが植えられており、経営面積の合計は約100haになる。明らかに大規模な農業経営であることが分かる。南東部でオリーブ生産の調査をおこなった二ツ山（2011）¹⁵⁾は、一世帯あたり数本から数百本のオリーブを植えている農家が多いことを指摘している。

A氏はこれらのオリーブ畑のすべてを、父親からの相続により所有している。一人息子であったため、親からのオリーブ畑を、分割せずに相続することができたらしい。周囲にあるオリーブ畑も、A氏の叔父や従兄弟など、親族のオリーブ畑によって囲まれている。これらのオリーブ畑の木の中には、A氏の曾祖父が植えられたものが含まれており、古いものは130年ほどになるという。A氏の曾祖父を中心とした親族集団がこれらのオリーブ畑を管理し、それぞれ相続してきたことがわかる。実際、親族のある者が土地を売りに出す場合には、他人の手に渡るより前に、親族のメンバーが購入するべきだと考えられている。

オリーブは収穫量に格差があったとしても、100年以上にわたって実をつけ続けることができる。つまり、同じ場所に整然と並んだオリーブ畑には、数世代にわたる家族や地域の人びとの関わってきた歴史が組み込まれている。このためそれぞれのオリーブの木がいつの時代に植えられているものなのかを、何世代にもわたる畑の持ち主は把握している。たとえばA氏は、ある年落雷によって幹から折れてしまい、自ら植樹して再び実がなるようにしたオリーブの木を見て、その時の状況を詳細に説明することが可能であった。

A氏自身も、毎年オリーブの苗木を植えたり、防虫対策（殺虫剤を用いない）をしたりして、畑の管理と維持に努めている。また、現在においても、オリーブの栽培は雨のみに依存した無肥料、無農薬による栽培である。むしろ最近では、海外では特に、「有機農法」で栽培されたチュニジア産オリーブの評価が高くなっている。

オリーブの生産については、オリーブ用の畑とオリーブの苗木の確保、それに労働力の利用が重要な要素となる。

オリーブ栽培の労働は、土壌や樹木の管理作業と収穫作業の二つに大きく分けられる。1977年のONHの調査によると、労働時間のうち管理作業が全体の64%、収穫作業が36%を占めていた。土壌や樹木の管理作業というのは、樹木の病気を防ぐと共に、降った雨水がオリーブ畑に満遍なく行き渡るように、水を適切に管理することが重要となる。たとえば畑を軽く耕して畝を作ったり、逆に平らにならしたりしておくことが、枝の剪定とともに必要となる。また、雨水が樹木のまわりにたまってしまうと、樹木に病気をもたらしたり、実のつきが悪くなったりするので、水の排水も注意深く行なう必要がある。このような作業は、これまで主に人の力で行なわれていたが、A氏は現在では親族と共同でトラクターを購入

して、トラクターによって行なっている。一方、収穫作業は現在でも手作業でおこなわれる。収穫作業では、男女がペアになって行なわれ、男性が実を落とし、女性がそれを拾い集めて収集を行なう。A氏は近くの集落の人々を、現金を用いて必要な人手を雇用している。¹⁶⁾

A氏は、オリーブ畑の所有者であるとともに、オリーブ加工工場の共同経営にも参加し、さらにオリーブを輸出する貿易会社も運営している。小さな加工工場であるが、収穫したオリーブの実を選別し、加工し、オリーブ油を精油し、瓶詰めを行ない、商品名を標したラベルを張り、箱詰めし、販売する直前までの作業をオリーブ農園の周辺で行なっている。

現在では、A氏の活動は、オリーブをいかに海外向けに販売できるかに向けられている。A氏は、チュニジア産オリーブ油のパッケージの改良を図り、世界で進行しつつある健康ブームを利用して、販売のプロモーションを行ない、海外に直接販売しようとしている。実際、A氏のチュニジア産オリーブは、オーストリア、オランダ、アメリカ等の国々に、直接輸出されている。

7. 農業生産と環地中海をめぐる食料貿易との関係

チュニジアにおける農業生産は、自国用の食料生産と、海外輸出用の食料生産とに分かれる。自国用の食料生産では、小麦が中心的な作物として生産されている。

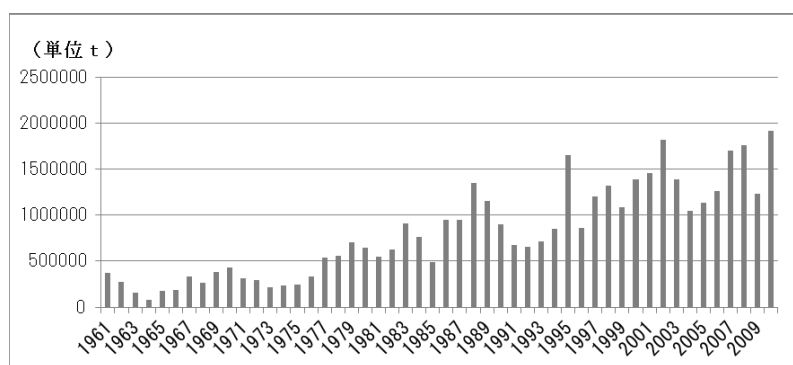


図7 小麦の輸入量 (FAOSTATより作成、筆者一部改変)

しかし、その生産量は、必要量の半分近くにすぎない。しかも、降雨量の変動によって小麦の生産量は大きく変動するため、前年の半数程度の生産量に陥ることも少なくない。

このため、チュニジアは恒常的に、小麦を輸入している。かつては、ヨーロッパの環地中海諸国からの輸入量が多かった。1960年代は10万tから30万tの輸入だったものが、1970年代後半に入ると50万tを超え、1990年代に入ると100万tを超える輸入量になる。さらに2000年代に入ると150万t前後の輸入がしばしば行なわれるようになる。2000年代に入って

も、国内生産量が100万t前後を推移しているのに対し、輸入量は着実に増加しているといえることができる。

表1 チュニジアにおける主要小麦輸入国と輸入量の変化（単位トン）

| | 輸入量 合計 | フランス | イタリア | スペイン | 環地中海 EU3国計 | アメリカ | カナダ | メキシコ | 新大陸 3国計 | ロシア | カザフス タン | ウクラ イナ | 旧東欧 3国計 |
|------|-----------|---------|---------|---------|---------------|---------|---------|---------|------------|---------|------------|-----------|------------|
| 1987 | 944735 | 374170 | 5 | | 374175 | | 25450 | | 25450 | | | | |
| 1988 | 1351468 | 179984 | 129592 | | 309576 | 619309 | 48903 | 118727 | 786939 | | | | |
| 1989 | 1156300 | 415910 | 90358 | | 506268 | 201138 | 28700 | 253475 | 483313 | | | | |
| 1990 | 897618 | 406099 | 55202 | | 461301 | 325557 | 20447 | | 346004 | | | | |
| 1991 | 676981 | 121175 | | | 121175 | 354528 | 14700 | | 369228 | | | | |
| 1992 | 653565 | 120463 | 8639 | | 129102 | 235005 | | | 235005 | | | | |
| 1993 | 714857 | 242089 | | | 242089 | 435691 | | | 435691 | | | | |
| 1994 | 851996 | 204915 | 18978 | 200 | 224093 | 482532 | 5795 | | 488327 | | | | |
| 1995 | 1652381 | 402847 | 22413 | | 425260 | 431306 | 224927 | 23021 | 679254 | | | | |
| 1996 | 860299 | 65205 | | | 65205 | 306598 | | 22351 | 328949 | | | 50383 | 50383 |
| 1997 | 1205319 | 212423 | | | 212423 | 357365 | 89965 | | 447330 | 37077 | | | 37077 |
| 1998 | 1320029 | 468672 | | | 468672 | 208047 | 24926 | | 232973 | 40645 | | 29174 | 69819 |
| 1999 | 1086451 | 517098 | | | 517098 | | 27383 | | 27383 | 14265 | | 42798 | 57063 |
| 2000 | 1385025 | 541767 | | | 541767 | 52264 | | | 52264 | | | | |
| 2001 | 1454300 | 197568 | 2890 | 8162 | 208620 | 205592 | 132281 | | 337873 | 16415 | | 59941 | 76356 |
| 2002 | 1815725 | 97708 | 6381 | 219095 | 323184 | 45042 | 350329 | | 395371 | 87148 | 103869 | 431664 | 622681 |
| 2003 | 1385256 | 500426 | 7500 | 69878 | 577804 | 72746 | 353681 | | 426427 | 125398 | | 180762 | 306160 |
| 2004 | 1043465 | 160299 | | 21103 | 181402 | 107187 | 58188 | | 165375 | 134632 | | 171239 | 305871 |
| 2005 | 1132924 | 85614 | 13871 | 26808 | 126293 | 1408 | 21863 | 0 | 23271 | 230953 | | 487638 | 718591 |
| 2006 | 1258091 | no data | no data | no data | no data | no data | no data | no data | no data | no data | no data | no data | no data |
| 2007 | 1696283 | 87908 | 63612 | 49130 | 200650 | 143510 | 126762 | 28500 | 298772 | 571915 | 150777 | 131400 | 854092 |
| 2008 | 1762440 | 197344 | 266495 | 59808 | 523647 | 46864 | 105544 | 28938 | 181346 | 293538 | 94490 | 320570 | 708598 |
| 2009 | 1232426 | 125582 | 93089 | 17650 | 236321 | 29755 | 135593 | 36979 | 202327 | 129600 | 6037 | 529597 | 665234 |
| 2010 | 1914864 | 262158 | 279311 | 51125 | 592594 | 92428 | 129368 | 81662 | 303458 | 128559 | 10277 | 547630 | 686466 |

(FAOSTAT, 2012より加工、筆者作成)

それでは、チュニジアでは、小麦はどこから輸入されており、それは変化しているのだろうか。（表1）1980年代の後半には、チュニジアは90万tから120万tの小麦を輸入していたが、それは二つの地域からであった。ひとつは、地中海沿岸の北側の国々、フランスとイタリアで、輸入量はほぼ3分の1から2分の1で37万tから50万tの輸入がなされていた。もうひとつは、アメリカ、カナダ等新大陸の国々からの輸入で、こちらも全輸入量の2分の1から3分の2、少ない年で35万tから多い年で79万tを占めていた。1990年代になると、アメリカ、カナダからの輸入依存度が徐々に高くなる。一方ヨーロッパでは、ほぼフランスからだけの輸入になっていき、その量も1995年を除けば、20万t以下に減少していく。このような、ヨーロッパと北アメリカの国々からの小麦輸入は、1990年代後半に入ると一変する。旧ソビエトの中にあつたウクライナ（1996年）、カザフスタン（1997年）、ロシア（1998年）が、小麦輸入の相手国として参入してくることになる。特に2002年以降は、この三国だけで60万t規模の輸入量となり、逆に、アメリカ、カナダからの輸入量は40万t規模に減少し、さらに低下している。フランス、イタリアからの輸入量も2000年から2007年にかけてはさらに減少し、多い年（2003年）でさえ50万t、他の年では20万t前後になってきている。

この傾向は現在まで続き、三つの地域からの輸入が、チュニジアの小麦輸入を支えている。2010年度は、フランス、イタリア、スペインから59万t（約30%）、アメリカ、カナダ、メキシコから30万t（約15%）、ウクライナ、カザフスタン、ロシアから69万t（約35%）の輸入割合であった。より詳しく見てみると、いったんは15%を切っていたヨーロッパ、特に地中海諸国からの輸入は、2008年度以降はやや増加傾向にある。おそらく、フランスのサルコジ大統領を中心とした環地中海貿易圏構想により、全体の30%を超える小麦輸入がなされたと考えられる。

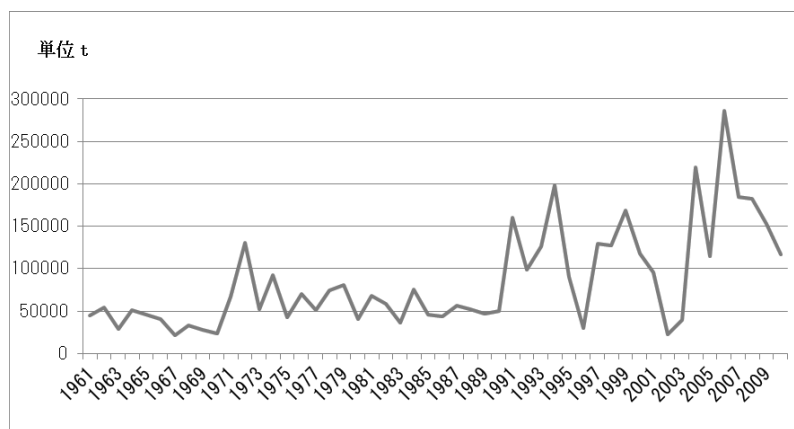


図8 オリーブ・オイルの輸出量の変化 (FAOSTAT より作成、筆者一部改変)

次に、輸出品目を見てみる。輸出品目の中心にあるのは、オリーブである。(図8) オリーブ・オイルの輸出は、1960年代から1980年代にかけて、3万tから10万t程度であったものが、1990年代に入ると毎年15万tを超える年が多くなる。販売額も1億ドルから3億ドルへと増加する。チュニジアは、2010年において、世界第3位のオリーブ・オイル輸出国である。ちなみに、第1位はスペインの84万7000t、第2位はイタリアの34万3000tであり、チュニジアは10万8000tである。

輸出の相手国としては、1980年代にはイタリアがその3分の2以上を占めていた。特に1988年には82%、1989年には91%、1990年には87%であったものが、2008年以降は、2008年には49%、2009年には45%、2010年には46%へと、約半数程度にまで減少してきている。それに代わって、1980年代には2000t代にすぎなかったアメリカが2008年以降は2万tから3万tに増加し、同じく1980年代には4000tから6000tにすぎなかったフランスが、2008年以降は1万4000tから2万tへと増加している。このほか、1990年代から輸入が始まったスペインは、実は世界一のオリーブ産出国である。スペインもチュニジアのオリーブ・オイルを3万tから7万t程度輸入しているが、2009年以降はその量は減少に転じている。

ここからは、以下のようなことが明らかになる。まず、イタリアは、オリーブの生産国であり、オリーブ・オイルの輸出国であるが、同時にオリーブ・オイルの世界最大の輸入国で

表2 チュニジアにおけるオリーブ・オイルの主要輸出国と輸出量の変化（単位トン）

| | 総輸出量 | イタリア | フランス | スペイン | 環地中海 3国計 | アラブ 首長国 | モロッコ | サウジ アラビア | アラブ 3国計 | アメリカ |
|------|---------|---------|---------|---------|-------------|------------|---------|-------------|------------|---------|
| 1987 | 56974 | 14873 | 2502 | | 17375 | 16 | | 177 | 193 | 2110 |
| 1988 | 52161 | 42310 | 3675 | | 45985 | 58 | | 83 | 141 | 2163 |
| 1989 | 46909 | 42854 | 2125 | | 44979 | 16 | | 139 | 155 | 1295 |
| 1990 | 49717 | 43053 | 3347 | | 46400 | 11 | | 243 | 254 | 1238 |
| 1991 | 160666 | 112974 | 2000 | 38000 | 152974 | 27 | | 72 | 99 | 2528 |
| 1992 | 98469 | 59632 | 5500 | 22650 | 87782 | 11 | 1000 | 142 | 1153 | 369 |
| 1993 | 126240 | 45250 | 44250 | 22455 | 111955 | 26 | 4810 | 50 | 4886 | 2239 |
| 1994 | 197782 | 99019 | 15000 | 65665 | 179684 | | 2396 | 34 | 2430 | 1565 |
| 1995 | 90824 | 67500 | 2 | 19679 | 87181 | | | 2 | 2 | 2011 |
| 1996 | 30529 | 22977 | 1927 | 4000 | 28904 | | | | | |
| 1997 | 129573 | 73326 | 9385 | 18993 | 101704 | 256 | | 67 | 323 | 1217 |
| 1998 | 127082 | 94126 | 359 | 16261 | 110746 | 178 | | 151 | 329 | 2476 |
| 1999 | 168304 | 77534 | 108 | 67271 | 144913 | 196 | | 40 | 236 | 4019 |
| 2000 | 118179 | 89419 | 274 | 12712 | 102405 | 303 | 1039 | 391 | 1733 | 3491 |
| 2001 | 95842 | 77428 | 456 | 5851 | 83735 | 139 | 665 | 722 | 1526 | 4840 |
| 2002 | 22527 | 19604 | 50 | | 19654 | 160 | 30 | 743 | 933 | 932 |
| 2003 | 39935 | 28044 | 74 | 8722 | 36840 | 125 | | 250 | 375 | 1392 |
| 2004 | 219586 | 138197 | 373 | 53253 | 191823 | 96 | 985 | 98 | 1179 | 13711 |
| 2005 | 114538 | 77139 | 183 | 25394 | 102716 | 71 | 14 | 98 | 183 | 4800 |
| 2006 | no data | no data | no data | no data | no data | no data | no data | no data | no data | no data |
| 2007 | 184350 | 101283 | 2442 | 37210 | 140935 | 465 | 3808 | 693 | 4966 | 18356 |
| 2008 | 182518 | 89783 | 4761 | 38506 | 133050 | 429 | 4204 | 352 | 4985 | 22390 |
| 2009 | 152585 | 69339 | 4363 | 9653 | 83355 | 766 | 9536 | 755 | 11057 | 29265 |
| 2010 | 116713 | 53706 | 5607 | 9870 | 69183 | 860 | | 1270 | 2130 | 22328 |

(FAOSTAT2012より加工、筆者作成)

もある。ちなみに2010年度において、イタリアは56万3000tのオリーブ・オイルを輸入しており、その単価はt当たり2711ドルである。日本の輸入単価が5001ドル、ドイツの輸入単価が4048ドルであることと比較すると極端に少ない。これは、イタリアが自国内でのオリーブのオイルだけではなく、その他の国のオリーブ・オイルを低価格で購入し、加工して製品を作り、再輸出しているからである。実は、チュニジアは、そうしたイタリア向けのオリーブ・オイルの最も重要な輸出国となっているのである。チュニジアのオリーブ・オイルの輸出単価は2844ドルであり、イタリアの輸出単価は4275ドルである。イタリアはチュニジアからオリーブ・オイルを輸入して、それをそのままか、さらに加工し、製品に付加価値を加えて輸出しても、十分利益をあげられることがわかる。一方、スペインの輸出品のトン当たり単価は2911ドルで、こちらはチュニジアの輸出価格とあまり差がない。したがって、チュニジアのオリーブ・オイルをスペインが輸入するメリットは少ないと考える。イタリアのオリーブ・オイルは、世界一のオリーブ・オイルとしてのブランド力があり、高価格で輸出されている。一方、チュニジアのオリーブ・オイルも、質的には高いという評価があっても、それは良く知る人々に限られ、世界市場に対するブランド力はない。ここに、チュニジアのオリーブ・オイルがイタリアに輸出される構造が明らかになってくる。

8. おわりに—食料生産と食料貿易の関係—

農産物を中心として見てみると、チュニジアの地中海貿易は、2種類の食料が逆向きで貿易されていることになる。チュニジアは、オリーブ・オイルを輸出し、小麦を輸入していることになる。単純に考えれば、自給用食料生産から換金用食料生産へと移行が起きていると捉えるかもしれない。しかし、実際にはこの貿易構造はそれほど単純なものではない。

第一には、チュニジアにおいては、環境の要因が現代の農業生産においても大きな影響を与えていることである。小麦にしてもオリーブにしても、年々の生産量はその年の気象条件によって大きく変わってくる。これは、他の温帯や亜熱帯に属する国々と比べると、より大きな変動要因である。特に、適切な時期に適切な降雨量がない年には、農産物の生産に直接影響し、破滅的な影響を与えることになる。現在のところチュニジアでは、こうした環境要因を大幅に改善し、回避するための人工的な装置が、国全体には行きとどいていないことになる。このため、気象条件の変化が、農産物生産に直接影響を及ぼしている。

小麦、オリーブ、ナツメヤシを比較すると、気象条件の影響を強く受けるのは、地中海気候地域の小麦であり、次にステップ気候地域のオリーブ、最後が砂漠気候地域で生産されているナツメヤシになる。

第二には、食料貿易にみる特徴である。1960年代には、まだ旧植民地宗主国であったフランスとの貿易が盛んであった。しかし、1980年代になると、もはや必ずしもそうとは限らなくなる。さらに、2000年代に入って、世界の市場経済化が大きな影響を与えていることがわかる。1960年代は、チュニジアの輸出作物は、オリーブとワインをヨーロッパに輸出することが中心であり、典型的な換金作物貿易がなされていた。ただし、オリーブはワイン用のブドウと違い自給用の食料作物でもある。一方1980年代以降は、輸入品としての小麦の量が増加する。これは、自給用作物から換金作物への転換が起きたための現象ではなく、むしろチュニジア国内における人口増加が主な原因であると考えられる。小麦は自給用作物であり続け、生産量も増加しているが、人口増加には対応できなくなっており、そのため輸入量が倍増した。また、気象条件が悪化すれば生産量が減少する、より脆弱な生産構造になっていたと考えられる。

1990年代に入ると、ワインの輸出量は減少するが、逆にオリーブの輸出量は増加していく。オリーブの輸出相手国はヨーロッパの中でも旧宗主国であるフランスではなく、イタリアが中心である。また、チュニジア国内でオリーブ・オイルまで生産しているにも関わらず、イタリアへの輸出にとどまり、2000年以降も市場経済化に対応した世界展開ができていない。これは、小麦の輸入が、ヨーロッパ中心から新大陸の国々へ、さらに旧ロシアの国々へと変化して、世界的な貿易枠組みで行なわれていることとは対称的である。イタリアではオリーブ・オイルの製品としてのブランド化が確立し、逆にチュニジアではブランド化が確立していないことによる。このため、チュニジアのオリーブ・オイルはイタリアに輸出され、

さらに世界に輸出されていく構図が明らかになる。一方、オリーブだけでなく、ナツメヤシの輸出量が増えていることにも注目できる。2010年を例にとると、オリーブ・オイルの輸出額は3億ドル、ナツメヤシの輸出額は2億ドルとなり、農産物輸出の二大作物として、他の作物の4倍から5倍の額になっている。また、これら二つの輸出額を合計すると、主食となる小麦の輸入額4億8000万ドルに、ほぼ匹敵している。世界的な小麦価格の高騰がみられた2008年ですら、小麦の輸入価格は8億ドルにも達していたが、この年のオリーブ・オイルの輸出額は6億2000万ドル、ナツメヤシの輸出額も1億7000万ドルと増加していたので、両者の総計はほぼつりあっていたことになる。

第三には、食物供給と食物確保の問題である。小麦の生産量が足りない分は外国から輸入することによって確保できたとしても、それが実際に、チュニジアの人々の口に入るかどうかということが、ここでは重要な問題となる。小麦は存在していても、主食のパンやクスクスが食べられるかどうかという点である。これには、パンや小麦粉の消費者物価が関係してくる。しかし、実際にチュニジアでは、パンは一般的なパンに限ってのことだが、一個あたり0.2ディナール(日本円で約10円、2012年8月現在)と販売価格が決まっている。このため、主食としてのパンは安定した価格で確実に手に入るものと考えられる。¹⁷⁾ このためにチュニジア政府は、小麦の世界的な価格変動があったとしても、一定量の小麦を輸入し、購入しなければならず、そのための財政支出が行なわれていると考えられる。もっとも、こうした主食となるパンの価格の維持は、北アフリカではチュニジアに限って行なわれていることではない。たとえばモロッコにおいても、基本となるパン価格は維持され、そのための支出は王室から行なわれていると一般民衆からは、考えられている。¹⁸⁾

しかし、主食となるパンの価格が一定価格で抑えられているとしても、食生活の基本はパンだけではない。野菜や肉等食料品価格が高騰していたとすれば、食生活の基本が成立しないことになる。チュニジアの場合には、こうしたパン以外の商品価格の高騰と失業率の高さが、2011年のジャスミン革命を起こす原因のひとつになったと考えられる。

一方、野菜生産の変化をみると、1960年代当時には少なかったトマトの生産が、2000年をすぎても、上昇をし続けていることがわかる。トマトの消費はほとんどがチュニジア国内でなされる。年間ひとりあたり105kgにも達する消費は、チュニジアの一般の人々の食生活を大幅に改善している。さらに、地中海沿岸で主に生産されているこれらの野菜類は、砂漠地帯にも送られており、町の市場で比較的安価で販売されている。チュニジア料理にとって、これらの野菜類は、クスクスの材料や煮込み料理(タジン等)の材料として、多く使われている。ちなみに、一般の食生活からみると、チュニジア料理に利用されている野菜は、トマト、ピーマン、トウガラシ、ニンジン、ジャガイモ、タマネギ、ヒヨコマメ、キュウリ、ナスなどである。トマトとタマネギ以外の野菜は2009年で、総計147万tが生産され、その内144万tが国内で消費されている。同年のトマトの生産量は114万tであり、そのうち105万tが国内で消費され、また、タマネギの生産量は12万tであり、そのすべてが国内で

消費されている。トマトとタマネギ以外の野菜も、1960年代の30万tから1990年代の90万t、2000年代末の150万tと、徐々に5倍にまで増加してきている。これは、人口の増加が2.5倍であることと比較しても、はるかに増加しており、食生活の面では、野菜面での充実がみられる。

肉類に関しては、1960年代は牛肉が1.5万t、羊肉が2.5万t、鶏肉が8000t生産されていたものが、1990年代は牛肉が5万t、羊肉が5万t、鶏肉が7万tとなり、2009年では牛肉が5万t、羊肉が6万t、鶏肉が14万tとなっている。肉類は、そのほとんどが国内で生産され、消費されている。また、鶏肉がこの50年間で10倍以上も生産量を伸ばしてきているが、牛肉や羊肉は、約2倍に増加した程度で2000年代以降ではあまり変わっていないことがわかる。これは、鶏肉が牛肉や羊肉に代わる役割をはたし、増加したのだとみることができるだろう。

最後に、食料品の消費者物価に関する統計から分析を加えておこう。現在手に入るのは2010年までの統計であるので、2011年にジャスミン革命が起きる直前の物価変動に関する詳細はわからない。しかし、諸物価が2008年頃から上昇傾向にあること、また2010年においては、急激に上昇していることがわかる。特にクスクスや肉類、乳製品、トマト、ニンジンの価格上昇が著しい。(表3参照)

食料生産と食料貿易という当初の課題を考察すると、チュニジア全体は以下のようにまとめることができる。食料生産は生態環境要因に規定されている割合が、現在でも高い。そのため、気象条件の変化によって食料生産量の大小も大きく変化する。主食である小麦の生産は、この典型となっている。食料貿易は、この食料生産、特に主食用小麦の不足を補うための役割をはたしている。当初はヨーロッパを中心に輸入されていたが、1980年代末からは新大陸諸国からを含め、さらに2000年代に入ると、旧ソビエト圏の諸国が増加し、現在では三つの地域からの輸入小麦による食料確保が行なわれている。小麦生産が現状のように降水量に依存する割合が多過ぎるにおいては、この関係は存続せざるをえないと考えられる。一方、自給用農産物としては、野菜の生産と消費が伸びてきており、これらは直接人々の食生活の改善に寄与している。しかし、物価の高騰は、小麦に関しては政府による小麦やパンの安定価格政策のため、ある程度高騰がくい止められているが、野菜や肉に関しては直接影響を及ぼし、高騰している。

食料輸出は、オリーブ・オイルが中心であり、その輸出先はヨーロッパが大半である。オリーブ・オイルに関しては地中海貿易が現在でも重要な位置を占めていることがわかる。オリーブ・オイルの輸出額は増加し、ナツメヤシの輸出額と合わせると小麦の輸入額に匹敵する額を創出している。一方、ナツメヤシの輸出は、北アフリカからの出稼ぎ者や移民の多いヨーロッパが大半であるが、モロッコなど近隣アラブ圏諸国への輸出も増加してきており、2012年にシリアが内戦状態に入ってから、さらに輸出量が伸びると推定される。これも、これまでとは異なった意味での環地中海貿易であると指摘できる。

表3 チュニジアの食料品物価の変化（2006-2010）

穀物

| | スモール小麦 | クスクス | マカロニ | 小麦粉 | パン | 米 |
|------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 2006 | 420 | 735 | 760 | 510 | 480 | 790 |
| 2007 | 433 | 760 | 786 | 573 | 480 | 840 |
| 2008 | 450 | 795 | 820 | 630 | 480 | 1205 |
| 2009 | 450 | 795 | 820 | 630 | 480 | 1450 |
| 2010 | 465 | 820 | 846 | 630 | 490 | 1450 |
| 単位 | Millime/kg | Millime/kg | Millime/kg | Millime/kg | Millime/kg | Millime/kg |

肉・乳製品

| | 牛肉 | 羊肉 | 鶏肉 | 卵 | 牛乳 | チーズ |
|------|------------|------------|------------|------------|-----------|-------------|
| 2006 | 11340 | 11243 | 3317 | 87 | 720 | 1132 |
| 2007 | 11254 | 11303 | 3517 | 104 | 768 | 1200 |
| 2008 | 11344 | 11438 | 3811 | 117 | 906 | 1330 |
| 2009 | 11814 | 12210 | 3953 | 122 | 970 | 1378 |
| 2010 | 13477 | 13554 | 4095 | 123 | 1030 | 1382 |
| 単位 | Millime/kg | Millime/kg | Millime/kg | Millime/pk | Millime/l | Millime/bte |

野菜

| | ニンジン | キャベツ | タマネギ | ピーマン | ジャガイモ | トマト |
|------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 2006 | 475 | 535 | 429 | 1087 | 489 | 642 |
| 2007 | 567 | 510 | 606 | 1038 | 597 | 614 |
| 2008 | 582 | 483 | 570 | 1198 | 562 | 767 |
| 2009 | 584 | 589 | 607 | 1345 | 706 | 720 |
| 2010 | 610 | 557 | 592 | 1205 | 624 | 810 |
| 単位 | Millime/kg | Millime/kg | Millime/kg | Millime/kg | Millime/kg | Millime/kg |

Annuaire statistique de la Tunisie 200-2010, Institut National de la Statistique 2011をもとに加工、筆者作成。

1Millime（ミリム）とは、1チュニジャン・ディナールの1000分の1を示す。日本円で、約0.05円（2012年8月時点）。

注

- 1) アマルティア・センは、『貧困と飢饉』の中で、以下のように述べている。「飢餓（starvation）とは、十分な食べ物を持っていない人々を特徴づける言葉である。十分な食べ物がそこにいるという状況の特徴づける言葉ではない。後者は前者の原因の一つとなり得るが、多くの可能性の中の一つの原因にすぎない。飢餓が本当に食料供給と関連しているのか、どのように関連しているのかは、現実から検証すべきことである。」『貧困と飢饉』p.1。

FAOは、2009年11月に開催されたローマでの「世界食料安全保障サミット」で、世界の飢餓人口は10億人を超えたと発表している。なお、FAOの現在における推計値は、2010年で飢餓推計人口は9億2500万人である。

- 2) 中尾佐助、『栽培植物と農耕の起源』、岩波書店、1966、p.22、p.85、p.142、pp.176-177、p.180
- 3) フェルナン・ブローデルは、その著書『地中海』の第1部に「環境の役割」を配置している。その中では、第1章に諸半島—山地、高原、平野を、第2章で地中海の心臓部—海と沿岸地方を、第3章で地中海の境界、あるいは最大限の地中海を、第4章で自然の一体性—気候と歴史を、第5章で人間の一体性—交通路と都市、都市と交通路を論じている。

- 4) 私市正年、「第3章 マグリブの歴史 IIIマグリブ中世の歴史」、宮治一雄・宮治美江子編『マグリブへの招待—北アフリカの社会と文化—』、p.45。私市正年によると、カイラワーン（カイルワン）の建設は670年、完成は675年、14の門、7つの城壘、15の貯水池が備えられていた。800年にアグラブ朝の首都となり、学問研究のセンターとなったが、876年移転され、南方9キロのラッカードが以後王都となった。（私市正年、「15都市めぐり②カイラワーンとラッカード」鷹木恵子編、『チュニジアを知るための60章』、明石書店、2010、pp.106-110）
- 5) 宮治美江子「都市めぐり③チュニス」鷹木恵子編、『チュニジアを知るための60章』、明石書店、2010、pp.111-114
- 6) 渡辺司は、「第3章 マグリブの歴史 IV近代・現代（植民地時代）3. 独立以降のチュニジア」宮治一雄・宮治美江子編『マグリブへの招待—北アフリカの社会と文化—』の中で、5つの政治時期区分による分析を行なっているが、ここでは、ブルバギ、ベン・アリのそれぞれの統治時期と、2011年以降の新しい政治的展開の時期の計三つに分けた。
- 7) ジャスミン革命については、Éditions du Layur の編集した D'Égaye: la revolution Tunisienne - 17 décembre 2010 / 14 janvier 2011, Éditions du Layur, Tunis, Tunisie, 2011 が、チュニジアの人々自身の収集した各地の情報、写真類をそのまま編集出版し、ジャスミン革命の経過を記録している。
- 8) フェルナン・ブローデル『地中海』、第I巻、pp.284-287
- 9) フェルナン・ブローデル『地中海』、第I巻、p.286
- 10) ちなみに、2010年度はナツメヤシ8万4200tを輸出し、輸出額は2億ドルになっている。2010年度の小麦の輸入額4億7700万ドルは、オリーブ・オイルの輸出額3億900万ドルとナツメヤシの輸出額2億ドルの合計に、ほぼ匹敵することになる。
- 11) 2010年の生産統計では、トマトの生産量110万t、生産額4億652万ドル、アーモンドの生産量6万t、生産額1億8592万ドル、ピーマン（トウガラシを含む）の生産量28万t、生産額1億3181万ドルとなっており、これらが主要農産物である。
- 12) FAOSTAT 生産統計 (<http://fao.org/site/339>、2012年9月30日) より。
- 13) Office National de L'Huile のこと。オリーブ・オイルの工業化、商業化を目指す、チュニジアの公的な機関であり、現在も存続。以下 ONH と表記。
- 14) 全体として7地域に、さらにサブ・カテゴリーに分類されている地域も含め、合計17地域の分類が示されている。Office National de L'Huile, L'Olivaie Tunisienne, SAGEP. Tunis, Tunisie, 1977
- 15) ニツ山達朗「チュニジア南東部のオリーブ生業とその意味」『イスラーム世界研究』（1-2）、pp.638-642による。
- 16) 農業労働者の雇用は、2010年6月時点で一日当たり8,380ディナール（約420円）という最低賃金が設定されている。INS, Annuaire statistique de la Tunisie 2006-2010, Tunis, Tunisie, 2011、p.115による。
- 17) パン1個の価格は変化がないが、2011年からは、パン1個当たりの重量が少なくなっていると、住民は言っている。また、表3からも、1kgあたりのパンの価格は上昇していることが事実であると推定できる。
- 18) 2011年における筆者自身のモロッコでの調査結果による。

<謝辞>

本論文は、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤（C）（課題番号：23580300）によって実施された調査研究の成果の一部である。研究と調査の実施に際し、ニツ山達朗氏から、有益なコメントとサジェスチョンをいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

欧文献

- [1] Alif-Les éditions de la Méditerranée, Olive trees, olives, olive oil, The National Heritage, Tunis, Tunisie, 2008
- [2] Dominique Bottani, l'Olivier, Édition Équinoxe, Saint-Rémy-de-Provence, France, 2011
- [3] Éditions du Layur, D'Égège: la revolution Tunisienne - 17 décembre 2010 / 14 janvier 2011, Éditions du Layur, Tunis, Tunisie, 2011
- [4] Éditions du Jaguar, Atlas of Africa, le groupe jeune Afrique, Paris, France, 2000
- [5] Gilbert Benhayoun et Yvette Lazzeri, l'Olivier en méditerranée: du symbole à l'économie, L'Harmattan, Paris, France, 2007
- [6] INS, Annuaire statistique de la Tunisie 2006-2010, Tunis, Tunisie, 2011
- [7] INS, Statistique du commerce extérieur :année 2010, No.41, Tunis, Tunisie, 2011
- [8] INS, Statistique du commerce extérieur :année 2007, No.38, Tunis, Tunisie, 2008
- [9] Michel Courboulex, les oliviers, Éditions Rustical/FLER, Paris, France, 2009
- [10] Ministère de l'agriculture et de la pêche maritime, Produits du terroir du Maroc, Catalogue national, Rabat, Maroc, 2010
- [11] Mohamed Tahar Berryry, Pains et société: Contribution à l'histoire socioculturelle de la question des vivres, Centre de Publication Universitaire, Manouba, Tunisie, 2010
- [12] Office National de L'Huile, L'Olivaie Tunisienne, SAGEP, Tunis, Tunisie, 1977
- [13] Zouhair Ben Jemaa, La cuisine tunisienne : Patrimoine et Authenticité, Simpact, Tunis, Tunisie, 2010

日本語文献

- [1] アマルティア・セン、『貧困と飢饉』、黒崎卓・山崎幸治訳、岩波書店、2000
- [2] フェルナン・ブローデル、『地中海』（普及版、I巻、II巻、III巻、IV巻、V巻）、浜名優美訳、藤原書店、2004
- [3] フェルナン・ブローデル、『ブローデル歴史集成 第1巻 地中海をめぐる』、浜名優美監訳、藤原書店、2004
- [4] フェルナン・ブローデル、『ブローデル歴史集成 第2巻 歴史学の野心』、浜名優美監訳、藤原書店、2004
- [5] フェルナン・ブローデル、『地中海世界』、神沢栄三訳、みすず書房、2000
- [6] フェルナン・ブローデル、『地中海の記憶—先史時代と古代』、尾河直哉訳、藤原書店、2008
- [7] 古川久雄、『オアシス農業起源論』、京都大学学術出版会、2011
- [8] ニツ山達朗、「チュニジア南東部のオリーブ生業とその意味」『イスラーム世界研究』（1-2）、638-642、2011
- [9] イマニュエル・ウォーラーステイン他、『入門・ブローデル』、尾河直哉訳、藤原書店、2003
- [10] イマニュエル・ウォーラーステイン、『近代世界システム—農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立—I、II』（岩波モダンクラシックス）、川北稔訳、岩波書店、2006
- [11] 川勝平太、『文明の海洋史観』、中央公論社、1997

- [12]川田順造、『アフリカ史』山川出版社、2009
- [13]吉良竜夫、『森林の環境・森林と環境—地球環境問題へのアプローチ』、新思索社、2001
- [14]吉良竜夫、『吉良竜夫著作集2 消えゆく熱帯林—多様性の喪失』、新樹社、2011
- [15]宮治一雄・宮治美江子編、『マグリブへの招待—北アフリカの社会と文化—』、大学図書出版、2008
- [16]中尾佐助、『栽培植物と農耕の起源』、岩波書店、1966
- [17]大塚和夫編、『世界の食文化10 アラブ』、農文協、2007
- [18]小田英郎・川田順造・伊谷純一郎・田中二郎・米山俊直監修、『新版 アフリカを知る事典』平凡社、2010
- [19]嶋田義仁、『砂漠と文明—アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明論』、岩波書店、2012
- [20]末原達郎、『文化としての農業 文明としての食料』、人文書館、2009
- [21]鷹木恵子、『マイクロクレジットの文化人類学—中東・北アフリカにおける金融の民主化に向けて—』、世界思想社、2007
- [22]鷹木恵子編、『チュニジアを知るための60章』、明石書店、2010

(受理日 2013年1月8日)